

# メルボルン大学の日本語教育及び日本研究 ーオーストラリアの「アジア化」に応じてー

隈本・ヒーリー順子

## 日本語講座の歴史

メルボルン大学の日本語教育講座は1965年に開講されたが、長い間中国語優先政策の下でその発展を阻まれ沈滞を続けた。1988年のいわゆる「津波」現象はメルボルンでも見られたが、（この年にオーストラリア全土の大学の日本語コース登録者の数が爆発的に増え様々な問題を引き起こしたが、このことを津波と呼んでいる。）新しい時代の波に対応しきれず混迷が続いた。

オーストラリア政府は70年代以降、アジア・太平洋地域の一員としての認識を持ち始め、80年代には、いわゆる「アジア通のオーストラリア人を育てる。」(Asia Literate) というスローガンの下で積極的なアジア言語推進政策を打ち出した。日本語はアジア言語の中で最優先言語の一つに挙げられ、学校でも大学でも日本語は最も人気の高い言葉となった。このような状況で期待される日本語教育とは実際の「役に立つ」日本語であった。観光産業と結びつけた「Tourist Japanese」なるコースなどを出す大学も出てきた。

1990年に12月、開講以来の最後のスタッフが定年退職し、新しいスタッフ就任と同時に1991年から全く内容を異にする新しい日本語コースが誕生した。まさに新しい皮袋に新しいワインが注がれたのである。

## 日本語講座の概要

オーストラリアの大学はイギリスの大学制度を模して創られ、教養課程がないので通常三年で卒業する。これを普通学位 (Pass Degree) と呼ぶ。しかし成績優秀者で大学院に入学希望者などは更にもう一年勉強して論文を書かなければならない。この四年目のコースを Honours Course と言い、パスすれば優等学位 (Honours Degree) が授与される。

日本語は文学部 (The Faculty of Arts) の外国語 (ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語、スウェーデン語、アラビア語、インドネシア語、中国語) の中で、学生数が500人以上と一番多い。

日本語コースは初級レベル (Japanese 1A/1B) から上級レベル (Japanese 5A/5B) までであるが、1996年からもう一つコースが増え、Japanese 1A/1B から

Japanese6A/6B までとなる予定である。（「A」は前期を「B」は後期を示す。）  
Japanese 1A/1B、2A/2B、3A/3B、4A/4B は、授業時間数はそれぞれ年間 150 時間  
間で、Japanese5A/5B、6A/6B は、100 時間である。

メルボルン大学だけではなくオーストラリアの大学の特徴は、一年生の中に必ず  
日本語初心者と既習者がいることである。既習者は更に大きく分かれ、大学入学資  
格試験（ヴィクトリア州ではVictorian Certificate of Educationと呼び、V.C.E.の略称  
で知られている。）の科目の一つに日本語を選択し、5年間中等教育で日本語を学  
んだ者である。この学生たちを通常、高校組あるいはVCE組と我々は呼んでいる。  
もう一つのグループはロータリーやAFSなどを通して日本の高校に交換留学生とし  
て一年間滞在したことがある学生たちである。しかし、最近他の理由で日本に住ん  
だことがある学習者も増え、様々な背景を持つ既習者が出始めている。

初心者の場合普通学位の学生は Japanese1A/1B、Japanese2A/2B、Japanese  
3A/3B と順に学んでいって卒業するが、優等学位の学生は Japanese4A/4B が四年目  
の日本語になる。

今年までは高校組・留学組は Japanese2A/2B、Japanese3A/3B、Japanese4A/4Bと  
取り、Japanese5A/5Bが四年目のコースになる。ただ特に優秀な学生は  
Japanese3A/3B から始めることが許されている。その場合 3A/3B、4A/4B、5  
A/5Bと進んでいくが、優等学位の学生は四年目の日本語のコースがなくなってしまう。

初心者のコースと既習者のコースが、初級から上級まで、全く別々になっていれ  
ば問題はないが、今年までは初心者の流れと既習者の流れが二年目で合流するた  
め、Japanese2A/2B は学生の日本語能力の差が激しく、教師も学生も不満を持ち続  
けてきた。初心者組は一年の時に比べ、急に難しくなると言い、一方、既習者の多  
くは易しいと思うらしい。特に留学組は、聞く・話すことにかけては高校組ですら  
そのレベルに及ばず、初心者組はここにきて、自信を喪失してしまう者が多い。同  
じコースの中で会話のクラスは違ったレベルに分けても学生たちの時間割がまちま  
ちなので、必ずしも全ての学生が自分に合ったレベルのグループに入れるとは限ら  
ない。当然、初心者組の中に元留学生が入り、ペラペラとやれば「とてもとても足  
下には及ばない」と思うのも、よく理解できる。教師はそれほど上手だと思わなく  
ても、初心者の耳には流暢なすばらしい日本語に聞こえるらしい。

この問題を解決するために、従来までの Japanese1A/1Bと 2A/2B の間に新しい  
コースを設け、（1996年からはこれを新 Japanese2A/2B とする。）三年目で合  
流させることにした。従って、来年からは既習者は Japanese3A/3B、  
Japanese4A/4B、Japanese5A/5B と進み Japanese6A/6B が四年目のコースである。  
既習者の中で特別優秀な学生は Japanese4A/4B から始め、Japanese6A/6B で終わ  
る。これだと、四年目の日本語のコースがなくなるが、他の四年生のコースで埋め  
合わせる。

これで問題が全く解決するとは考えていないが、少なくとも二年間は初心者組だけというのは、学生にとっても教師にとっても現時点ではありがたいことだとしなければならない。因みにオーストラリアの大学の多くは一年目の時だけ切り離して二年目で合流させるところが多い。学生数からすれば今まで一年生の中で初心者は200人から250人と圧倒的に多く、(既習者は60人から70人ぐらいであった。)一年目から三年目の初心者だけのコースがあつて当然だが、限られたスタッフの数でいくつもコースを作るわけにはいかない。ただ今年は登録する学生の数を制限したため初心者が減り、反対に既習者が増えた。

### 日本関係のコース

メルボルン大学では日本・中国研究学科だけではなく、学科以外にも、英語で講義される日本関係のコースがある。日本・中国研究学科では上記の日本語講座と日本関係のコースがいくつかある。そのうちの 하나가、一年生のコースで「日本文明—過去と現在」(Japanese Civilization, Past and Present)である。これは日本語・日本研究専攻の学生には必修である。それから、今年から新しく日本からの衛星放送が受信できるようになったので、それを利用した新しいコースが生まれる予定である。

日本・中国研究学科以外のところでは、政治学科、史学科、商学科、法学部にそれぞれの分野で日本を研究対象にしているスタッフがいる。その中で日本関係のコースが出されている。

### 日本語講座の特徴

日本語を勉強している学生は日本語が文学部のコースであるにもかかわらず、学部以外の学生が半数近くを占めているのが、まず大きな特徴である。法学部、経済・商学部、工学部、理学部、医学部、教育学部、などの学生が日本語を学んでいる。そして、自分の専門分野と日本語を組み合わせることを希望している学生が多い。その場合、二つの学位(Double Degrees)を取得するやりかたがある。例えば、文学士(B.A.)に法学、経済、商学、工学、理学などを、組み合わせることができる。これは二つの学位を取るのに五年かかるが、厳しい就職難になってきた昨今、希望する学生は多くなってきている。この場合、文学部に籍がある限り、日本語を含めたどのような外国語を専攻することに支障はない。

しかし誰もがこのようなやり方ができる訳ではない。文学部以外の学生で日本語を勉強したい学生はどうしたのだろうか。1994年までは文学部所属でない場合、自分の専門分野の勉強のかたわら日本語を学ぶことは自己犠牲を強いられることであった。日本語を勉強しているが故に、半年ないしは一年卒業が延びてしまい、成績証明書には日本語コースの成績は載るが、自分の専門分野の学士号しか取

得できない。

このような学生のために新しい考えに基づくディプロマ制度が今年から始まった。(Concurrent) Diploma in Modern Languages と呼ばれるものである。従来、ディプロマ・コースは学部を卒業してから更に、一年間フルタイムで何らかの資格を取るためのコースである。当然学士号を持っていることが入学の最低条件である。

しかし新しいディプロマは学部在籍している間に、一つの外国語のコースを三年間取れば学士号取得と同時に授与される。日本語を勉強した経済の学生であれば、経済学の学士号と Diploma in Modern Languages - Japanese の二つの資格が得られるのである。この制度は今年から実施されているが、メルボルン大学の全ての学生に外国語を学習する機会を与えようとする大学の積極的な姿勢がうかがわれるものとして高く評価すべきである。筆者が知る限り、このようなディプロマはメルボルン大学が初めて導入したもので、他のオーストラリアの大学では存在しない。

#### 日本語講座の内容 (学生のニーズ、カリキュラムなど)

学生たちのほとんどが口を揃えて言うのは「日本語が話せるようになりたい。」ということである。それに応えるために聞く・話すことに力を入れている。しかし、他の技能を無視している訳ではない。Japanese 1A は、初日から「ひらがな in 48 minutes」を使い、ひらがなを導入し、その後はコンピュータを使って、まずは「読み」を徹底させる。そして「書く」ことに入る。ローマ字は一切使用しない。この後カタカナがひらがなと同様にして導入される。Japanese 1B に入ると、150の漢字が導入される。Japanese 1A/1B から Japanese 3A/3B までは、クラスでは話すことに重点を置きながらも読み・書きの技能を組み入れている。

しかし、上級レベルでは書くことよりも読んで理解することに重きが置かれる。これは普通オーストラリアの大学で、三年間の日本語クラスの時間数は約450時間しかない。しかも、日本語だけ学んでいる訳ではない。その上、授業の外では日本語に触れることができない環境で学んでいるのである。当然、限られた時間と環境の下ではまず何を教えなければならないか選択に迫られる。決して書くことを軽視している訳ではないが、十分書く力をつけるのに時間がかかることである。

また、ワープロの普及により漢字の意味が分かり読めることが必要になってきた。オーストラリアで日本語修了生に要求されるのは書けることよりも読めることであると思う。日本語・日本研究専攻の大学院生でも日本語で書かれた資料・文献は読めなければならないが、論文は英語で書くのが普通である。洗練された、十分日本語として通じる文章が書けるようになるまでは長い時間が必要である。

日本の外での限られた時間数の日本語教育であるが、どうにかして習得を助ける方法がないかという模索しているが、メルボルン大学でしていることで特筆すべきことを下記に挙げておく。

- 1 コンピュータによる日本語学習支援体制を整えている。大学には語学学習を目的としたマルチ・メディア・コンピュータ・ラボが二部屋ある。一つは二年前にでき、マック IIVXが26台備え付けられていて外国語学習にフルに利用されている。需要が供給をはるかに上回り、今年もう一つのラボが完成した。また、筑波大学との電子メール・プロジェクトも今年の十月から始まっている。
- 2 日本の大学と学生交換協定を結び、一年間勉強できる機会を設けている。現在慶応大学に二名、一橋大学に二名、立命館大学に三名、上智大学に三名学んでいるが、来年からこれらの大学に東京工業大学が加わる。
- 3 現役の学校の教師を日本語が教えられる教師に、衛星放送を利用して訓練してほしいとヴィクトリア州教育省から依頼があり、1993年7月から特別の日本語コースが始まった。学習者は州の田舎に住んでいるため、近くに大学の日本語コースがなく、遠隔地教育によってしか資格が取れないのである。遠隔地教育と言えば、通信教育によるものが多いが、衛星放送を使っていることが目新しい。放課後、衛星放送を利用した週二回、一時間半の生の日本語レッスンの放送見て、電話とファックスでスタディオの教師と質疑応答をやるのである。これ以外に学校の休み中に集中コースがある。家庭を持っている教師が仕事をしながら、日本語を続けることは非常に困難なことである。1996年1月で終了するが、果たして何人生き残れるだろうか。

教授法については筆者の論文「ファンクショナル・アプローチ文法の取り扱い方をめぐって」を参照されたい。

### 将来の課題

日本語学習者の多様化が指摘されているが、メルボルン大学でも例外ではない。過去二十年、オーストラリアの大学で日本語を学ぶ学生も変わってきた。量から言えば、一年生から三年生まで三、四十人という家内工業的規模から五、六百人という大世帯に膨れ上がった。このような状況で効率よく教えていくためには何をすべきか。現在、CALL (Computer Assisted Language Learning) に力を入れているが、まだどこまでできるのか、その力は日本語教育にとって未知数である。コンピュータの可能性は大きいですが、それをフルに教師が活用できるのかどうかが一番問題である。しかし、これには前向きに取り組んでいくつもりである。

専門分野と日本語を組み合わせる学生が多くなってきているが、これらの学生のニーズに合った個別のコースが必要になってくるだろう。これは日本語の基礎を習得した学生で、更に専門書などの読解力をつけたい学生の数が増えてくれば当然新しくコースを設けなければならない。